日蓮聖人の「病」に関する説示について

野口眞澄

一、はじめに

仏教では、人生の苦悩の根本原因として生・老・病・死の四苦が説かれており、「病」はそのうちの一つに数えられている。この避けることのできない病苦を、宗教的見地にたって把握し、解決を加えていくことは、仏教者の宗教活動の一つの課題である。したがって、日蓮聖人の「病」に関する説示について考察をすることによって、日蓮聖人の思想と行動への理解を深めることができると思われるのである。

日蓮聖人は晩年に自身も「やせ病」に苦しみ、また檀越の中にも病苦にさいなまれる者がいたことが知られている。そのような状況の中で、聖人は、四苦の一つ「病苦」についてどのように説示し、またそれを克復していったのだろうか。そこで本稿では、聖人の宗教活動をとらえる視点の一つとして「病」に関する説示をとりあげてみたい。

日蓮聖人遺文中には、「病」に関する説示が数多く見受けられる。一言で「病」といってもそれらの説示の内容は多岐にわたっており、聖人の教示の真意を把握するためには、その内容ごとに分類して考察すること、それらを総合的にとらえて考察することが必要であろう。

日蓮聖人の「病」に関する説示の内容は、基本的には、日蓮聖人自ら「夫人に二病あり。一には身の病（略）。二には心の病(1)」と、「身の病」と「心の病」があると述べられていることから、まず色心二法に分けて考えなければならない。さらにその両者の関連についても考察するべきであろう。

いっぽう茂田井教亨教授は、聖人が歴史的現象を「事」と表現し、経文に説示される理を「心」と表現し

て「事の心を案ずるに」等と説示される意図を、現実の課題を経文に照らし合わせることによって真実の認識を極ることと理解しておられる(2)。「病」についてもこのような見方をするならば、「事」は実際に起った「病」である。そこで現実に病苦に悩んだ人についての説示をみると、概ね

一、日蓮聖人御自身の病状についての説示

二、檀越の病に対する説示

三、当時の疫病の流行に関する説示

の三項目に収約することができるのではなかろうか。

次に「心」、すなわちこれらの現実問題を勘えるに際して、引用された経・論の説示の内容を類別するならば、

・大集経の三災、薬師経の七難、金光明経・仁王経における仏教違背により疫病等の諸難が起こるという経文

・法華経寿量品の、釈尊の衆生救済を医師の治療に譬えた「良医喩(3)」

・法華経薬王品の「此経則為閻浮提人病之良薬」。若人有レ病。得レ聞二是経一病即消滅。不老不死(4)。」という法華経自体が病の良薬であるとする経文

・法華経陀羅尼品の「若不レ順二我呪一　悩二乱説法者一頭破作二七分一(5)」、勧発品の「若実若不実。此人現世得二白癩病一(6)」といった法華経修行者を迫害することにより病が起こるという経文

・涅槃経現病品(7)の説示

・涅槃経梵行品の、阿闍世王の仏教入信による悪瘡平癒の説示(8)

・『摩訶止観』第七正修止観章第三観病患境(9)の説示

などが挙げられ、この他にもいくつかの経・論が引用されている。

現実の「病」についての説示と、経論の説示との関連をみると、例えば、建治元年十一月三日の『太田入道殿御返事(10)』では、「御痛事一歎二一悦」と太田入道の病について述べられている。ここでは「病」に関する経論を多数引用した後、「已上引二上諸文一惟勘二御病一」と、引用した経文によって、太田入道の病について検討を加えられ、その平癒のための教示を与えられている。

以上、聖人の「病」に関する説示が多岐にわたっていることを踏まえて、その御意図を正確に把握するために、どのように理解したらよいかを考えた。

つぎに、日蓮聖人が具体的にどのように説示しているかを、特に「当時の疫病の流行に関する説示」に視点をあてて少しく考察してみたいと思う。

二、疫病の流行の状況

日蓮聖人在世には、何度か疫病が大流行したようである。はっきりと疫病が流行したことが確認できる遺文とその系年を示すと、

①『災難対治鈔(12)』正元二年二月
②『立正安国論(13)』文応元年七月
③『安国論御勘由来(14)』文永五年四月五日
④『種種御振舞御書(15)』建治元年
⑤『松野殿御返事(16)』建治四年二月十三日
⑥『弘安改元事(17)』弘安元年
⑦『檀越某御返事(18)』弘安元年四月十一日
⑧『日女御前御返事(19)』弘安元年六月二十五日
⑨『富木入道殿御返事(20)』弘安元年六月二十六日
⑩『中務左衛門尉殿御返事(21)』弘安元年六月二十六日
⑪『千日尼御前御返事(22)』弘安元年七月二十八日
⑫『上野殿御返事(23)』弘安二年十一月六日

等を挙げることができる。

これらによれば、日蓮聖人が疫病の流行として注目されていたのは、第一に、正嘉から正元（一二五七～一二六〇年）の頃、第二に、建治三年から弘安元年（一二七七～一二七八）の頃の二つの時期であることが伺えるのである。

ところで、⑥『弘安改元事』に見られるように、当時は災害等による改元、すなわち「災異改元」が頻繁におこなわれていたことに着目して、日蓮聖人御在世の改元の状況を、見てみると、疫病の流行が改元の理由の主要なものとされる年号は、嘉禄（一二二五年）、安貞（一二二七年）、康元（一二五六年）、正元（一二五九年）、弘安（一二七八年）である(24)。すなわち、これらの改元の前後には、多少なりとも疫病が流行していたと考えられるのである。

このうち嘉禄と安貞は、日蓮聖人が四歳、六歳という時期であったので、疫病の流行について注目し、書簡に記録するまでには至らなかったものと推察される。

康元と正元、弘安の場合は、日蓮聖人が注目された疫病流行の時期と一致するので、聖人は改元に影響を及ぼす程の疫病の流行には、しっかりと注意を払っておられたということが伺われる。

三、疫病の流行に関する説示

この二回の疫病の流行のうち、正嘉前後の疫病の流行

についての日蓮聖人の意見は、『立正安国論』で当時の世の乱れを「三災七難」としてとらえている中に見出すことができる。つまり世の乱れが起った経証として、大集経の三災、薬師経の七難、また、金光明経・仁王経の仏教に違背する謗法や、国王の仏法不擁護により世の乱れが起こるという内容の経文等が引用されているが、疫病が流行するということも、それらの経文中に他の災難と一緒に説示されているので、そうした災難の一つとして経文の如くにとらえられていたと察せられる。また『災難対治鈔(25)』、『安国論御勘由来(26)』においても同趣旨に受けとめられていたと思われる。

またこの頃、一連の災難について勘えられることとなった一番のきっかけは、『安国論副状(27)』『安国論奥書(28)』に見られるように、疫病ではなく地震であり、疫病についての具体的な説示はない。

ところが建治元年に『種種御振舞御書』で、このころの災難を振り返り

其頭のわれし時ぜひ〳〵やみ（喘息）、五蔵の損ぜし時あかき腹（赤痢）をやみしなり。これは法華経の行者をそしりしゆへにあたりし罰とはしらずや(29)。

と述べられている。これは、法華経陀羅尼品の「頭破作七分」の経文から、正嘉の災害をとらえたものであり、ここでは法華経の行者出現の意義が強調され、疫病についてもやや具体的な表現がなされている。

次に、弘安元年頃の疫病に関する説示を見ると、まず『日女御前御返事』では、

今日本国の去年今年の大疫病は何とか心うべき。此を答ふべき様は一には善鬼也。梵王・帝釈・日月・四天の許されありて法華経の怨を食す。二には悪鬼が第六天の魔王のすゝめによりて法華経を修行する人を食す(30)。

と、疫病は法華経修行者に味方する善鬼と、邪魔をする悪鬼によって起こるとしている。

つぎに『富木入道殿御返事』では、

先代未聞の三災七難起こるべし。所謂去今年、去ヌル正嘉等の疫病等也(31)。

と疫病を中心に三災七難をとらえ、その原因を全篇にわたって整理して述べられている。

『中務左衛門尉殿御返事』では、

夫人に二病あり。一には身の病。所謂地大百一・水大百一・火大百一・風大百一、已上四百四病。（略）

今の日本国去今年の疫病は四百四病にあらざれば華他・偏鵲が治も及ず。（略）彼非仏難治。此非法華経難除(32)。

と、疫病は身の病でなく心の病であり、仏、法華経によらなければ治癒し難いと述べられている。

『千日尼御返事』では

法華経の行者をあだまんものをば頭破七分等と誓せ給て候へばいかんが候べきと、日蓮強盛にせめまいらせ候ゆへに天此国を罰。ゆへに此疫病出現せり(33)。

と、日蓮聖人を迫害した罰として疫病が起ったということを間接的に述べられている。

このように、疫病について、徐々に具体的な説示がなされる。

日蓮聖人の「病」についての説示は、前述のように、疫病についてだけでなく、檀越の個人的な病や聖人自身の病についての説示も多数ある。それらすべての説示を通して、「病」について最も整理して説示されている遺文として、前出の『太田入道殿御返事』、『富木入道殿御返事』、『中務左衛門尉殿御返事』の三書が挙げられる。

建治元年の『太田入道殿御返事』は、前述の通り日蓮聖人が太田入道という学識のある者の病をきっかけに、「病」に関する諸経論を再認識することとなった遺文であると考えることができよう。

弘安元年の『富木入道殿御返事』は、『日蓮聖人遺文辞典　歴史篇(34)』に、「富木氏の書状に『凡そ疫病弥興盛云云』とあったことから、日蓮は病について論じ、身の病は医薬によって治癒するが、心の病は正しい法華経の信心がなければ治癒することができないと、法華経本門の肝心である題目によってのみ世間に充満している謗法を対峙することができるとしている。とくに、末法時の題目弘通には天台・伝教等の時の三障四魔にまさった大難が出来するとし、この大難の出来こそ、天台・伝教の理の一念三千（迹門の一念三千）と異なった事の一念三千の世界であり、これが本門の一念三千であるとしている。」と解説されているように、聖人の「病」と「一念三千」についての認識が示されている遺文である。ここでは、疫病等の三災七難と、聖人の宗教の枢要をなす一念三千の法門との関連が明かされているのであり、病と疫病についての結論的な説示であると考えることができよう。また、この遺文の端書には、同日にしたためられた『中務左衛門尉殿御返事』を指して「此法門のかた

つらは左衛門尉殿にかきて候」と述べられている(35)。この二書は同一の法門について説示されているのであり、『中務左衛門尉殿御返事』も病と疫病についての重要な説示であるといえよう。

四、むすび

以上、日蓮聖人の「病」に関する説示が多岐にわたっていることを確認し、そのうち疫病についての説示を中心にそれらを概観し、日蓮聖人の「病」に関する認識が明示されていく過程を見ることができた。

正嘉の疫病流行の頃は、地震や彗星や飢饉などとともに疫病・病について認識されているのであり、『立正安国論』等で関係の経文を引用されるだけで、特に疫病・病についての説示はなされていない。その後、何人かの檀越の病悩に応えていくなかで徐々に「病」についての認識を明示されて行くが、『太田入道殿御返事』を経て、弘安の頃になると疫病の流行と聖人自身の病(36)も重なっていよいよその考えを深められて、『富木入道殿御返事』『中務左衛門尉殿御返事』での「病」に関する重要な説示がなされるに至ったものと推察できる。

註

(1) 立正大学日蓮教学研究所編『昭和定本日蓮聖人遺文』(以下『定本遺文』と省略)一五一七頁、一五二三頁。
(2) 茂田井教亨稿「日蓮教学における「時」の問題」『日蓮教学の根本問題』所収(昭和五六年、平楽寺書店)。
(3) 『大正新脩大蔵経』(以下『大正蔵経』と略称)第九巻四三頁A
(4) 『大正蔵経』第九巻五四頁C
(5) 『大正蔵経』第九巻五九頁B
(6) 『大正蔵経』第九巻六二頁A
(7) 『大正蔵経』第一二巻六六九頁C以下。
(8) 『大正蔵経』第一二巻七一七頁A以下。
(9) 『大正蔵経』第四六巻一〇二A以下。
(10) 『定本遺文』一一一五~八頁
(11) 『定本遺文』一一一六頁
(12) 『定本遺文』一六三頁
(13) 『定本遺文』二〇九頁
(14) 『定本遺文』四二一頁
(15) 『定本遺文』九八五頁
(16) 『定本遺文』一四四一頁
(17) 『定本遺文』一四五四頁
(18) 『定本遺文』一四九三頁
(19) 『定本遺文』一五一〇頁

（『大崎学報』１０３号所収）に詳しく考察されている。

（20）『定本遺文』一五一九頁
（21）『定本遺文』一五二三頁
（22）『定本遺文』一五四六頁
（23）『定本遺文』一七〇九頁
（24）『古事類苑』歳時部・年号を参照した。
（25）『定本遺文』一六三頁
（26）『定本遺文』四二一頁
（27）『定本遺文』四二一頁
（28）『定本遺文』四四二頁
（29）『定本遺文』九八五頁
（30）『定本遺文』一五一〇頁
（31）『定本遺文』一五一九頁
（32）『定本遺文』一五二三～四頁
（33）『定本遺文』一五四四頁
（34）立正大学日蓮教学研究所編、八一二頁。
（35）向井教遠稿「治病鈔著作年代考」（『大崎学報』３５号所収）では、『富木入道殿御返事』の系年について、弘安元年頃の疫病の流行と『中務左衛門尉殿御返事』との関連において考察されている。この端書を一つの根拠として、二書が同日に執筆されたと推察している。
（36）『中務左衛門尉殿御返事』に「日蓮下痢去年十二月廿日事起リ、今日六月三日・四日、日々に度をまし月々ニ倍増す」（『定本遺文』一五二四頁）とある。なお、日蓮聖人の病については、宮崎英修稿「日蓮聖人の晩年の健康をめぐって」